

初等教員養成課程におけるソルフェージュ教育のあり方について

—兵庫教育大学の事例を基に—

新山 真弓*

(平成7年12月8日受理)

はじめに

本論は、初等教員養成課程におけるソルフェージュ教育の授業内容について、前回の小論(注)で提案した、「弾き歌い」演習を導入する授業過程の1つとしてまとめたものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

- I. ソルフェージュ教育の意義と目的
- II. 初等教員養成課程における授業科目としての「ソルフェージュ」の問題点
- III. 授業科目「ソルフェージュ」の内容
 - 1) 各演習項目の学習目的と内容
 - 2) 各演習項目の順序
- IV. 授業科目「ソルフェージュ」の教育内容編成の試み
 - 1) 年間の主な項目立て
 - 2) 各時限の教育内容編成の試み
 - 3) まとめ

I. ソルフェージュ教育の意義と目的

ソルフェージュ教育とは、音楽を学習するために必要な、基礎的能力を身につけることを目的とするものである。さらに、音楽に対する理解度を深めるとともに、さまざまな曲の音楽表現をどのように引き出していくかということも主眼とすべきであろう。

したがって、教員養成系大学における授業科目としての「ソルフェージュ」は、その授業内容として、単に、聴音や視唱のための機能的な反復練習の域でとどまっていたはならない。

このことを踏まえて、教員養成課程、なかでも初等教員養成課程におけるソルフェージュ教育を考えると、けっして、高度な聴音能力等を身につけることを目的とするのではなく、あくまで、音楽を学ぶための手段でなくてはならないといえる。

具体的には、楽譜に書かれてある音程やリズムを正確に歌うこと、弾くこと、あるいは聴き分けることなどを習得し、さらには、基本的な和声感覚を理解できたり、あるメロディーに対する簡単な伴奏付けができる能力こそが、初等教員養成課程においては必要なものである。

そうしたことを前提として、授業科目としての「ソル

フェージュ」の内容が、学生にとって教育現場に立った時に役立つように、与えられた期間内に、効果的に習得できる授業方法を考えていかなければならない。

II. 初等教員養成課程における授業科目としての「ソルフェージュ」の問題点

ソルフェージュ教育を始める時期としては、聴力等の比較的柔軟な幼年期が理想的であると言われて久しい。

しかし、我が国の現状を考えると、特設音楽科を併設している高等学校などは別にして、義務教育においては、ソルフェージュ教育としての授業はなかなか設けられていない。

そのようなことから推察すると、ソルフェージュを受験科目として課している大学以外の大学では、ソルフェージュ教育を受けて入学してくる学生は、きわめて少ないと思われる。

以上のことを踏まえて、本学の場合を考えてみる。

本学は、初等教員養成のための教育大学である。受験時には、簡単な適性検査を施す程度で、ソルフェージュを受験科目とはしていない。そのことが是か非かは別として、前述のとおり、本学においても、受験までにソルフェージュ教育を受けて入学してくる学生は、きわめて少ないといえる。

ちなみに、筆者が担当した芸術系音楽分野の学生を対称とした「ソルフェージュ」のクラス受講者のうち、ソルフェージュ教育をまったく受けたことのない学生は、1994年度では17人中11人、1995年度では18人中13人である。

つまり、半数以上の学生は、ソルフェージュ教育を生まれて初めて受けるのである。また、ソルフェージュ教育を受けた経験のある学生の状況を見ても、幼年期から継続的に行ってきた学生は、両年とも一人も存在しない。

このような現実を考えたうえで、授業の進め方を検討してみる。

ソルフェージュ教育の方法としては、各々の能力に即した個人レッスン形態が理想的であると思われる。しかし、クラス授業という条件下で、また、限られた授業時

* 兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター(音楽教育分野)

間のなかでは不可能である。

学生が、義務教育において音楽を学んできたとはいえ、そのみの学生と、授業以外に音楽に関するお稽古ごとを経験してきた学生やクラブ活動（たとえば、吹奏楽部やコーラス部など）を続けてきた学生などと比較すると、読譜力ですら一様でないと考えられる。

理解度の異なる学生の、どこに焦点を合わせるかを十分把握しないかぎり、授業内容が重複したり、偏重になってしまう。

そのため、授業の能力別時間配分を考えていかないかぎり、教育効果は著しく低下するであろうことが予測される。

以上に基づいて、初等教員養成課程におけるソルフェージュ授業の進め方としては、下記のようなことを留意したい。

- (1) ソルフェージュ教育のごくごく初歩の段階から始める。
- (2) でき得る範囲で能力別グループ指導を心がける。

Ⅲ. 授業科目「ソルフェージュ」の内容

1) 各演習項目の学習目的と内容

(1) 楽典

楽典は、楽譜の読み書きに必要な音楽の基礎的な諸規則を学ぶことであるが、授業科目「ソルフェージュ」における楽典の学習は、聴音および歌唱の授業を行うために必要な、譜表上における知識を認識させる程度に留める。

(2) 聴音

聴音とは、聴こえてくる音を正確に書取ることであるが、その域に留まらず、正しいリズム感や調性感を養うとともに、記譜の基本的事項を再認識させることを目的とする。

①リズム聴音

リズム聴音は、正しいリズム感と拍子感を養うことを目的とする。

また、単旋律・2声聴音の書取りの際、音高感と同時に必要な能力を身につけることにある。

ここでは、ある一定の音を決定し、歌唱教材程度のレベル問題を実施する。

その際、拍子のとり方も理解させる。

②単音聴音

単音聴音は、音高を正しく認識することを目的とする。

ここでは、絶対音感を養うためではなく、音階の各音の位置の違いを認識させることを目的とする。

方法としては、基準音を与えて次音を指定し、声に出して歌わせる。

このことにより、音程を認識させることが可能と

なる。

また、単旋律・2声聴音へ進むために音を聴き分ける準備段階として行うものである。

③和声聴音

和声聴音は、重なった音の縦の響きと音高を聴き分けることを目的とする。

ここでは、和音の個々の判別のみならず、長・短・増・減3和音の響きの判別・機能（T、S、D）の認識を目的とし、4声体と和声聴音の準備段階として行うものである。

したがって、4声体と和声聴音に至れば、省略してもさしつかえない。

④単旋律聴音

単旋律聴音は、正しい拍子感・リズム感・音高感を養うことを目的とし、2声聴音の準備段階として行うものである。

また、単音聴音とリズム聴音が合わさった演習であり、すでに音高の違いも拍子のとり方も理解したうえで実施する。

課題としては、歌唱教材程度に留めたい。

⑤4声体と和声聴音

4声体と和声聴音は、調性感や和声進行の理解を目的とする。

ここでは、4声部すべての聴き分けを認識させるのみでなく、Sop.に対するBassの進行の認識、また、和声進行の理解を深め、編曲への基礎知識とすることにある。

⑥2声聴音

2声聴音は、単旋律聴音の目的に加えて、同時に2本の旋律を聴き分けることを目的とする。

ここでは、それに加えて和声進行の認識も望むものである。

課題としては、歌唱教材程度に留めたい。

⑦和声法

和声法は、和声進行の構造を認識することにある。

ここでは、和声の機能や進行を認識し、編曲していく上での基礎的知識の習得を目的とする。

また、2年次における和声学の予備知識として実施する。

⑧歌唱

発声法（腹式呼吸）を学習しながら、与えられた旋律を正しい音程・リズム・拍子で歌うことを目的とする。

教育現場を考えた場合、歌唱教材を用いながら、上記に加えて歌詞の発音の習得も盛り込んでいく。

⑨弾き歌い

弾き歌い演習は、教育現場においては必要不可欠で、もっとも有効な演習である。

楽典や聴音・和声・歌唱で学習してきた知識および能力を基礎としながら、実際に表現していくことを目的とする。

具体的には、伴奏付の歌唱教材を使って、個人レッスン形態で指導にあたる。

⑩編曲法

ここでの編曲とは、歌唱教材のピアノ伴奏譜を改作することである。

教育現場における編曲の大きな必要性は、

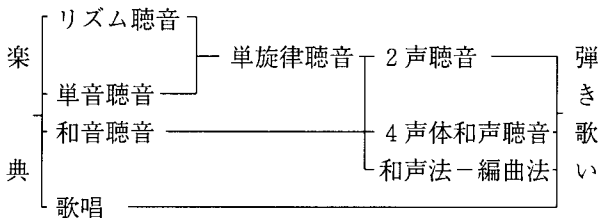
a：学生が教師になった時に、自身の能力に応じた伴奏が可能となること。

b：児童に対して豊かな和声感覚を培っていただけること。

の2つにあると思われる。

2) 各演習項目の順序

前述の授業内容を基に「弾き歌い」導入までの手順を考察すると、以下のようなことが考えられる。



IV. 授業科目「ソルフェージュ」の教育内容編成の試み

「ソルフェージュ」の教育内容を主な項目として、第1・2・3学期（それぞれ10週）に配分してみる。

1) 年間の主な項目立て

(1) 第1学期

①楽典：聴音および歌唱の授業を行うために必要な、譜表上における基礎知識を認識させる。

②聴音：聴音の演習により、正しいリズム感や調性感を養うとともに、記譜の基礎的事項を再認識させる。

- a. リズム聴音
- b. 単音聴音
- c. 和音聴音
- d. 単旋律聴音
- e. 4声体和声聴音
- f. 2声聴音

(2) 第2学期

第1学期の内容を応用していくことを中心としながら、以下のことを徐々に加えていく。

①和声法：和声聴音を行う時に平行して、ごく基本

的な和声進行を認識させる。

②歌唱：a. 発声法

b. 歌唱教材および、聴音問題を使用しながら、歌唱法などを認識させる。

(3) 第3学期

第1・2学期の内容を踏まえた上で、以下のようなことを行う。

- ①弾き歌い演習
- ②①に伴う伴奏
- ③編曲法

2) 各時限の教育内容編成の試み

各授業の計画配分は、以下のとおりである。

なお、1限は75分で行う。

(1) 第1学期

(第1週)

①ガイダンス

- a. ソルフェージュ教育の意義と目的
- b. 授業の展開について

②試験と調査

- a. 簡単な聴音書取り試験
 - ・和音聴音
 - ・単旋律聴音
 - ・4声体和声聴音
- b. 音楽学習歴調査

(第2週)

①楽典

- a. ドイツ音名
- b. 音部記号の種類・意味・書き方
- c. 音符と休符の種類・意味・書き方
- d. 拍子記号の種類・意味・書き方

②単音聴音

③和音聴音

- a. C dur の3和音の基本形6つ（減3和音のh-d-fは除く）の和音と、それに対する、根音を同じくする長3和音と短3和音の聴き分けを一人ひとりに行う（聴くのみ）。
- b. 転回形も同様に行う。

(第3週)

①楽典

- a. 音程：度数の数え方
 - 完全・長・短・増・減の種類と意味
- b. 音階：長・短音階
 - 主音・下級音・属音・導音の説明

②和音聴音

- a. 減3和音を加えたC dur 3和音の聴き分け

(転回形を含む)

b. 調号を変えての聴き分け (転回形を含む)

③リズム聴音：最初はごく簡単な問題を与え、学生の理解度に応じて、だんだんと高度なリズムを加えていく。

a. 2/4拍子 2小節

b. 3/4拍子 2小節

(第4週)

①楽典

a. 調：調と調名・調号・関係調

b. 大譜表の書き方

②和音聴音：書取り (10～20問)

③リズム聴音

a. 3/4拍子 2小節

b. 3/8拍子 2小節

(第5週)

①楽典

a. 和音：3和音・7の和音を構成する音の名称
基本形と転回形
和音記号

b. 和音聴音の際、和音記号を併せて書かせる。

②和音聴音：10～20問

③リズム聴音

a. 4/4拍子 2小節

b. 3/8拍子 2小節

④単旋律聴音：リズム聴音を参考にしながら、徐々に高度な問題にもっていく。

a. C dur 2/4拍子 2小節

b. C dur 3/4拍子 2小節

(第6週)

①和音聴音：10問

②リズム聴音

a. 4/4拍子 2小節

b. 6/8拍子 2小節

③単旋律聴音

a. F dur 3/4拍子 2小節

b. a moll 3/8拍子 4小節

④2声聴音：リズム聴音・単旋律聴音の理解度に応じて、Bassが1小節1音に対して、Sop.が旋律になるような平易な問題から始める。

・ C dur 3/4拍子 4小節

(2声聴音の理解度に応じて、以後のリズム聴音・単旋律聴音の省略を判断する。)

(第7週)

①2声聴音：C dur 4/4拍子 4小節

②4声体と声聴音：借用和音を含まないごく平易なもので、まずは外声部だけの聴音を行い、書取る声部を強めに何回も弾くことから始める。

・ C dur 2/2拍子 4小節

(第8週)

①2声聴音：C dur 3/8拍子 4小節

②4声体と声聴音

a. 外声部だけの聴音

・ C dur 2/2拍子 6小節

b. 内声部も含めて4声体を弾き、外声部のみを書取る。

・ C dur 2/2拍子 4小節

(第9週)

①2声聴音：a moll 6/8拍子 4小節

②4声体と声聴音：C dur 2/2拍子 8小節

内声部も書取り可能な学生には、実施させる。

(第10週)

以上のような授業を行った成果を、1学期の試験として実施する。

①和音聴音：10問

②リズム聴音：4/4拍子 2小節

③2声聴音：C dur 6/8拍子 6小節

④4声体と声聴音：C dur 2/2拍子 8小節

授業中のそれぞれの解答は、8割以上程度が正解である学生を選び、ホワイトボードに書かせる。そのことにより、少しでも楽譜を書くことに慣れさせる。

単旋律・2声聴音に関しては、歌唱が可能なかぎり歌わせる (ラララなど、または移動ドで)。

10数名の学生を、一度に教授していくことは困難なことであるが、極力、一人ひとりの出来具合を確認するように心がける。

(2) 第2学期

(第1週)

①ガイダンス

a. 1学期末の試験によって明らかになった結果より、1クラスを大まかに2つのグループに分かつ。

方法としては、時間差授業で、理解度の遅

れた学生のグループAを先に始め、平易な問題を与えるか、または、同問題を使って方法を変えて行う。

そして、比較的聴音能力の進んだ学生のグループBと合わせて授業を続ける。

たとえば、

ア. 2声聴音では、AグループではSop.だけを単旋律聴音としての課題とし、Bグループと合わせた時点で、2声聴音として行う。

その時、Aグループには、Bassを聴音させる。

イ. 4声体と声聴音では、Aグループでは外声部のみを課題として与え、Bグループと合わせた時点で、4声体と声としての聴音問題とする。

このことにより、先に挙げた問題点が、少しでも解消可能となるように試みる。

b. 2学期の授業内容の展開について

② 1学期末の試験の解答と解説

(第2週)

Aグループ

☆① 2声聴音：Sop.だけの単旋律聴音としての書取り

※② 4声体と声聴音：外声部のみを書取り

A+Bグループ

※① 4声体と声聴音：内声部を加え、4声体としての書取り

②和声法

a. 和音記号の復習(転回形を含む)

b. 和音の機能(T, S, D)

☆③ 2声聴音：2声聴音としての書取り

(☆※は、同問題を記す。また、形態も同様)

(第3週)

Aグループ

☆① 2声聴音

※② 4声体と声聴音

A+Bグループ

※① 4声体と声聴音

②和声法：和声進行のしくみ

☆③ 2声聴音

(第4週)

Aグループ

☆① 2声聴音

※② 4声体と声聴音

A+Bグループ

※① 4声体と声聴音：以後は、和音記号・和音機能も記す。

☆② 2声聴音

(第5週)

Aグループ

☆① 2声聴音

※② 4声体と声聴音：以後、借用和音を含む

A+Bグループ

※① 4声体と声聴音

②和声法：借用和音の説明と和音記号の書き方

☆③ 2声聴音

④発声法：腹式呼吸の説明

歌唱法：固定ド・移動ドの説明

(第6週)

Aグループ

① 2声聴音：理解度に応じて、Bグループと合わせるかどうかを判断していく。

※② 4声体聴音

A+Bグループ

※① 4声体と声聴音

☆② 2声聴音

③発声練習

a. 母音(a・e・i・o・u)で半音ずつ発声する。

b. 母音2種で2度音程の上下の発声

c. 長3和音の上下の発声

(以下の発声練習は同様)

(第7週)

Aグループ

※① 4声体と声聴音：理解度に応じて、Bグループと合わせるかどうかを判断していく。

A+Bグループ

① 4声体と声聴音

② 2声聴音

③発声練習

④歌唱：「もみじ」F dur 4/4拍子

a. 固定ドで歌う

b. 移動ドで歌う

- c. 歌詞朗読
- d. 歌詞を付けて歌う

(第8週)

A + Bグループ

- ① 2声聴音
- ② 4声体和声聴音：聴音の後、和声進行の確認
- ③ 発声練習
- ④ 歌唱：「もみじ」
 - a. 全員で2声部をそれぞれ歌う
 - b. 2グループで2部合唱を行う
 - c. 2人1グループで2部合唱を順に行う
- ⑤ 伴奏法：「もみじ」の伴奏譜の実技指導

(第9週)

A + Bグループ

- ① 2声聴音
- ② 4声体和声聴音
- ③ 発声練習
- ④ 歌唱：「もみじ」
 - 2人1グループで、ピアノ伴奏と独唱を順に行う。

(第10週)

以上のような授業を行った結果を、2学期の試験として実施する。

- ① 聴音書取試験
 - a. 2声聴音
 - b. 4声体和声聴音：和音記号・機能も併せて記譜させる。
- ② 歌唱試験「もみじ」
 - 2人1グループで、伴奏をし合って暗譜で歌う。

(3) 第3学期

(第1週)

- ① ガイダンス
 - 3学期の授業展開の解説
- ② 2学期末試験の解答と解説

(第2週)

- ① 和声法：歌唱のために用いる歌唱教材「冬げしき」を使って、
 - a. 和声進行の確認
 - b. 非和声音の説明
- ② 発声練習
- ③ 歌唱：「冬げしき」F dur 3/4拍子
 - a. 固定ドで歌う
 - b. 移動ドで歌う

- c. 歌詞朗読
- d. 歌詞を付けて歌う

(第3週)

- ① 発声練習
- ② 歌唱「冬げしき」
 - 歌詞を付けて歌う
- ③ 伴奏法：「冬げしき」の伴奏譜の実技指導

(第4週)

- ① 発声練習
- ② 歌唱「冬げしき」
 - a. 歌詞を付けて歌う
 - b. 2人1グループで、ピアノ伴奏と独唱を順に行う。

(第5週)

- ① 発声練習
- ② 弾き歌い：「冬げしき」の弾き歌い指導
(個人レッスン形態)

(第6週)

- ① 弾き歌い：「冬げしき」の弾き歌い指導
(個人レッスン形態)
- ② 編曲法
 - a. 編曲の意義
 - b. 編曲の目的
 - c. 編曲の手段
 - d. 伴奏譜の作り方

(第7週)

- ① 弾き歌い：「故郷の人々」D dur 4/4拍子
 - a. 伴奏付きの原曲のままで弾き歌い指導
 - b. 編曲法：「故郷の人々」
 - 学生各々のピアノ奏法能力に即した伴奏譜の作成を行う。

(第8週)

- ① 弾き歌い：「故郷の人々」
 - a. 各々の編曲した伴奏譜の指導
 - b. 編曲した楽譜での弾き歌い実技指導
- ② 編曲法：「もみじ」「冬げしき」
 - それまでに学習した2曲についても、伴奏譜を編曲する。

(第9週)

- 弾き歌い：「もみじ」「冬げしき」
 - 編曲した伴奏譜での弾き歌い実技指導

(第10週)

以上のような授業を行った成果を、3学期の試験として実施する。

- a. 「冬げしき」……原曲通り
「故郷の人々」…各自の編曲による
- b. 「故郷の人々」…原曲通り
「冬げしき」……各自の編曲による
- a. b. どちらかで受験する。

3) まとめ

(1) 各々の項目における授業の反省点と問題点

①楽典

聴音および歌唱の授業が行える程度の説明に留めたいところであったが、実際には、2年次以降のことを考え、その都度気付いたことを教授していくべきであろう。

②リズム聴音

音の判別が困難な受講者にも、拍子のとり方さえ正しく教授すれば、比較的容易に進めることが出来た。

③単音聴音

単音聴音が必要かどうかは考えていくべきであろうが、その他の聴音の準備程度になれば良いであろう。

④和音聴音

兩年度の受講生に限っては、聴音の経験がない学生も、響きの違いは明らかに判別出来得た。

しかし、和音の個々の聴き取りまでは、不可能であった。

⑤単旋律聴音

一般的に、旋律のみの音楽に接することは多くないので、2声・4声体と和声聴音の準備として行えば良いであろう。

したがって、2声聴音に入る段階までに留めた。

⑥4声体と和声聴音

経験したことのない受講者にとっては、著しく困難な課題であるといえる。

たとえば、Aグループに関しては、内声部まで聞き取れることが可能になった受講生は皆無に等しいことがわかった。

そうしたことを踏まえて、理論的に理解していく上でも、和声法の指導は欠かせないであろう。

⑦2声聴音

Sop.は、ほとんどの受講者が聞き取れる状態になった。

しかし、Bassが聞き取れない受講者の多くは、音高感の迷いにあるといえる。

⑧和声法

和声進行については、ごく基本的な機能 (T. S. D. T) 程度はほぼ全員が理解できた。

しかし、借用和音等、個々の十分な和音の判別などの理解は、まだまだ時間的に無理があると思われる。

⑨歌唱

本格的な声楽指導までは時間的にも不可能であるが、受講者がかつて義務教育で学んできたことがあるので、比較的容易に進めることができた。

あえて、視唱などのテキストを使わず、歌唱教材をもとに固定ド・移動ド唱法を行った理由も、ここにあると言える。

⑩弾き歌い

伴奏をしながら歌うという作業を初めて経験する受講者がほとんどであり、もっとも時間を費やしたい項目であろう。

⑪編曲法

原曲の和声進行どおりの伴奏型の創作は、比較的容易にできるが、和音を自身で編曲しての創作は困難であったように思われる。

(2) 今後の課題

今回の授業計画は、すでに1994年度の授業として試みたものである。

しかし、学生のソルフェージュ能力は、毎年一様ではないであろう。現に、今年度担当している「ソルフェージュ」は、昨年と同じような授業計画では進められていないのが現実である。

したがって、その年の学生のソルフェージュ能力に即した授業計画の調整は、つねに考えていかなければならないといえる。

また、各々の項目に関しても、たとえば、単旋律・2声聴音問題に耳に聴き覚えのある歌唱教材を取り入れていくというようなやり方も、初心者にとっては効果的な方法であるといえよう。

さらに、ソルフェージュ教育は継続的に進めて行くことが有効な方法であるが、1年次30時間を考えた場合、はたしてこれで十分であるかどうかという問題が起こってくる。

たとえば、各々の項目を少しずつでも毎時間行っていくためには、1年次に留まらず、2、3年次と続けて行くことが望ましいといえる。

おわりに

限られた時間内に、「弾き歌い」演習までも導入することは、困難なことであるかもしれない。

しかし、教育現場を考えたとき、もっとも有効な手立ての一つであると思える「弾き歌い」演習を、積極的に

取り入れて行きたいものである。

今後も、この課題について、引き続き研究していくものである。

注

拙稿「ソルフェージュ教育に関する一考察」『実技教育研究』第8号、兵庫教育大学学校教育学部附属実技教育研究指導センター、1993年

参考文献

論文

1. 永富正之著「ソルフェージュ教育概説」『東京芸術大学音楽学部年誌』第1集、東京芸術大学、1974年
2. 三好啓士著「音楽理論教育に関する研究(Ⅳ)」『広島大学教育学部紀要』第2部第34号、広島大学教育学部、1985年
3. 三好啓士著「ソルフェージュ教育に関する一考察」『広島大学教育学部紀要』第2部第35号、広島大学教育学部、1986年
4. 五味克久著「ソルフェージュ研究(その1)」『神戸大学教育学部紀要』第80集、神戸大学教育学部、1988年
5. 五味克久著「ソルフェージュ研究(その2)」『神戸大学教育学部紀要』第81集、神戸大学教育学部、1988年
6. 五味克久著「ソルフェージュ研究(その3)」『神戸大学教育学部紀要』第83集、神戸大学教育学部、1989年
7. 河口眞朱美著「ソルフェージュの教育的意義について」『季刊音楽教育研究』音楽之友社、1993年冬号
8. 大月玄之他共著「教員養成大学音楽専攻学生の音楽学習歴と書取能力との相関」『三重大学教育学部研究紀要』第45巻、教育科学、1994年
9. 松仲久儀・土屋公平共著「教員養成課程における伴奏付けの指導法」『金沢大学教育学部紀要』第44号、1995年

著書・テキスト

10. 安川加寿子著『ソルフェージュ』音楽之友社、1953年
11. 石桁真礼生他共著『楽典・理論と実習』音楽之友社、1965年
12. 小山章三著『ソルフェージュ・視唱のための30課』音楽之友社、1970年
13. 山縣茂太郎著『これからはじめる和音聴音』音楽之友社、1972年
14. M. ビッチュ・J. P. オルスタイン共著、池内友

次郎訳『音楽覚え書き帖』音楽之友社、1979年

15. 伊藤征夫著『やさしい視唱のレッスン・ピアノ伴奏付Ⅰ』音楽之友社、1991年
16. 伊藤征夫著『やさしい視唱のレッスン・ピアノ伴奏付Ⅱ』音楽之友社、1991年
17. 林原幾久他共著『総合ソルフェージュⅠ基礎』音楽之友社、1991年

A Solfeggio-training Program
Implemented at Hyogo University of Teacher Education
Mayumi Niiyama

Department of Music Education, The Center For Practical Education
Hyogo University Teacher Education

Solfeggio Training provides students with fundamental ability which they should master in the process of music education. Solfeggio must be taught in such a way that it will enable elementary school teachers to facilitate their student's music performance in actual classes.

Two of the effective ways suggested are to practice singing to the accompaniment of a piano and to arrange a piece of music for the instrumental accompaniment besides simply transcribing melody and harmony.

This paper discusses how a solfeggio-training program should be implemented, and shows the program into which the singing to the piano is introduced in the process of the elementary music education.